

おわらの情景 「姿なき われは待つ 9月3日は 聞名寺にて」 民謡の守門者 竹内勉 二つの境内で踊る越中八尾おわらのサウンドスケープ

レポート：加藤 明



越中八尾おわらの夕べ(名古屋東別院)

1. 越中八尾おわらとの出会い

私は約15年前、真宗大谷派名古屋別院(以下東別院)で開催された名古屋民族舞踊研究かすりの会のイベントに観客として参加し、越中八尾おわら踊りに出会いました。

この踊りは民謡でもなく、日舞でもなく、両方の特徴を巧みに取り入れた踊りで、地方の音楽と複雑に組み合わせたり、非常に魅力的であると感じました。

特に、東別院というお寺の広大な石畳の上で行われるこの優雅な踊りに感銘を受け、将来的に音響家としてこの踊りに関わりたいという夢を抱いていました。

私は、東別院でのイベントを見学した方が

おわら踊りを習いたいという希望で、八尾町の保存会には、町外の人々に踊りを教える仕組みが存在せず、越中八尾おわら道場(以下、道場)に同行して訪れることになりました。

私は踊りを習うのではなく、踊りを習いたい人々と同行する形で、長年にわたり道場の会員の方と交流し、その魅力を客観的に感じることができました。

私が最初に八尾の町を訪れたのは、6月でした。普段の生活の中で静かで美しい町並みが印象的で、その中に歴史と文化を感じることができました。特に、この町に存在する大きな浄土真宗本願寺派桐野山聞名寺(以下聞名寺)は、後におわらの歴史を知る上で重要



令和5年風の盆奉納踊り練習風景(聞名寺)

な役割を果たすことになりました。

2. 越中八尾おわら道場

昭和60年(1985年)4月に、明治時代に生まれた胡弓の名人である若林久義氏(故人)、囃子詞の名人である中田国嗣氏(故人)、そして当道場初代会長である佐藤清氏を中心に、八尾の町の有志十数人によって設立されました。この道場の設立の背後には、『観光に翻弄されるおわらが人気だけで中身を伴わないおわらになってしまうだろう』と真剣に芸事として捉え、保存しようとする人々の思いがありました。

富山県の越中おわら節の研修と伝承・普及を目的とし、おわら節各部門の教室(講習会)を運営し、居住地、年齢、性別を問わず誰でも門戸を開いています。

3. おわらの歴史

祭りの起源は元禄15年(1702年)の「町人パレード」説で、町民が文書の返還を祝って三日間にわたって歌い踊りながら町を練り歩いたことから始まりました。

「越中八尾」は、昔ながらの家並みが続く坂の町です。

「風の盆」は、毎年9月1日から3日間に

わたり、初秋に吹き始める風が心地よい季節に越中八尾で行われる祭りです。この祭りは観光客にも愛されており、八尾の伝統として根付いています。踊り手たちは浴衣を身にまとい、編笠で顔を隠し、三味線と胡弓と唄の地方音楽に合わせて優美に踊ります。

夜になると街流しで照らされた町を舞台で、美しい踊りが続きます。この祭りの魅力は言葉では表現しきれないものがあります。

4. 「風の盆」という言葉

この美しい言葉は、遠く奥飛騨地方…現在の高山市以北辺りが起源であろうと思われま

す。養蚕が盛んであった時代、8月15日の盂蘭盆会は、蚕が繭になりはじめる時期と重なるため、人々はその世話を忙殺され、お墓参りどころではなかったのでしょうか。そこで人々は辛い労働に明け暮れながら呟きました。

「ご先祖様、ごめんなさい。もう少し待ってくださいね…」と。

そしてようよう蚕が一段落して、村中がほっと一息つくことが出来た時、人々は吹きはじめた秋風の中を、遅れた墓参りにいそいそと出掛け、謹んでお礼の言葉を言いました。

「お蔭様で今年も良い繭がとれました。ご先祖様ありがとう…」

全国的に養蚕の盛んだった山間部では、「九月盆」や「秋盆」という言葉が残っていますが、飛騨地方ではこの遅れたお墓参りを秋風の吹く頃ということで「風の盆」と呼びました。

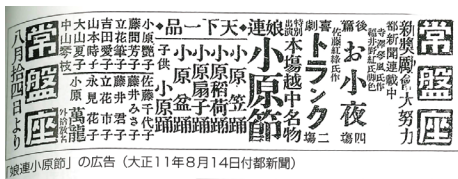
「盆」という語は「墓参り」の他に、古来「共同で休む」という意味を含みます。

おわらはかつて「回り盆」と呼ばれておりました。

「風の盆」を「風封じ」や引いては「豊作祈願」と説明するのは、正しい解釈ではありません。何故なら「風鎮め」を目的とするなら、それは「盆」ではなく「祭り」というのが筋だからです。 ※聞名寺HPより

5. 盆踊りから観光ブームへ

大正期の民謡ブームとおわらの人気



常盤座広告



小原萬龍一家の御園座興行の広告
〔御園座七十年史〕から

御園座広告

おわらは、唄や踊りの美しさに定評があり、「芸術民謡」とも「日本民謡の白眉」とも評される。しかし、昔も今と同じように演じられていたわけではないと思われます。大正から昭和の初めにかけて、

見違えるように磨き上げられました。

大正から昭和への時代の変遷で東京を中心に新たな民謡ブームが起こり蓄音機や演芸場の舞台がおわらを輝かせました。中でも小原萬龍一座のおわらは特に影響力があり、浅草常盤座や名古屋御園座で萬龍は「小原節の家元」として名高い存在でした。しかし、時代の変化とともにおわらの名声は衰え、昭和後半には伝説的な存在となりました。八尾おわら資料館初代館長の伯育男氏の古いレコード発見により、萬龍おわらの真実と影響力が再評価され、歴史の一部として語り継がれてい

ます。萬龍一座のおわらが持っていた影響力は驚くべきものであったようです。

花開いたおわらは、演芸場の舞台上で演じられる民謡ショーでした。他の地方の民謡が取り入れられたり、時には特異な演芸が行われたりするなど、おわら自体も本場のおわらとは異なる姿に変貌しました。このような民謡ショーは、観客の期待に応えることで成り立っていました。

❖おわらを全国的に広げた立役者

特に影響力を持ち、全国各地を巡業して一世を風靡したのが、小原萬龍一座でした。地元の八尾町民の中には、本場のおわらと一度も八尾の町を訪れたことがない萬龍おわらが混同されることに対する不満や、本来のおわらを大切に思う人々のプライドが存在したことでしょう。この時期、本場の八尾おわらは、おわらとしての舞台芸術としての可能性に気付き始めました。昭和初期、文人の手を借りて八尾おわらは洗練され、それは、萬龍おわらなどの流行に危機感を抱いたからかもしれません。地元のおわらは、寄席の舞台上で派手な演出をするものではありません。それに対照的に八尾おわらは草の根の風景や野生の要素と、優美で洗練された要素を組み合わせ、その独自性の自覚が生まれたのかもしれない。

❖盆踊りから舞台踊りへ

レコード市場の売れ行きの良さなど、一時期は八尾おわらよりも、萬龍おわらの方が圧倒的な存在感を放っていたのです。本場、八尾の人々は、そのような状況にどのような感じを抱いていたのでしょうか。昭和の初期、八尾では文人たち、小杉放庵や若柳吉三郎らの手によって、新たな風を取り入れて変わっ



小原萬龍レコード



四季踊り

ていきました。この時代の流れが、盆踊りや民謡のように同じ踊りや旋律が繰り返される本来の群れて踊る『豊年踊り』から見せる舞台踊り（女踊り・男踊り・夫婦踊り）と変化していき現代まで続いています

❖戦後の映画・小説・歌謡曲と観光ブーム

映画、小説、歌などのメディアを通じて越中おわらが紹介され、観光ブームが起きました。これにより、多くの観光客（推定20万人）が八尾を訪れ、越中おわらを題材にした作品も多く制作されましたが、町から情緒が消えて小学校隣接の敷地に演舞場を作るなど観光化が進みました。

6. サウンドスケープの考え方

サウンドスケープ(soundscape)は、1960



昭和30年の聞名寺(笠原輝芳画集)

年代にカナダの作曲家マリー・シェーファーによって提唱された概念で、「音風景」や「音景」とも呼ばれます。この考え方は、風景に音が欠かせないというアイデアから生まれ、サウンドスケープデザインの基盤となりました。サウンドスケープは、音を環境や風景の一部として捉え、日常の音や環境音に対する新しい視点を提供します。

具体的には、サウンドスケープは以下のよう
な要点を含んでいます：

❖音の風景としての捉え方：

サウンドスケープでは、音を風景や環境の一部として捉えます。つまり、音がある風景や場所にとって欠かせない要素であるという視点です。音は単なる騒音ではなく、その場所や環境の一部として存在します。

❖音の関係性の考察：

サウンドスケープでは、音とその周囲の環境との関係性に焦点を当てます。音がどのように環境に影響を与え、逆に環境が音に影響を与えるのかを考察します。これにより、音と環境との複雑な相互作用を理解しようとしています。

❖サウンドマーク：

特定の地域や場所に固有の音を「サウンド

マーク」として捉えます。これはその地域の特徴的な音であり、文化や環境に関連付けられています。サウンドマークは地域のアイデンティティを表す重要な要素とされています。

地域にとって特徴のある目印になるランドマークと同様に、その地域の特性を示している音をとらえる。風の一日の動きに合わせて村の音風景も変化します

7. 視覚と聴覚の関係

サウンドスケープの提唱者マリー・シェーファーは「人間の目にはまぶたがあるが、耳にはまぶたがない」という。モノはまぶたを閉じれば見えなくなるが、聞きたくない音は耳をふさいでも聞こえてしまう。つまり、脳が意識して不要な音を無視しているのである。これは人に大変なストレスを与える。私たち電気音響に携わる技術者にとって、ストレスを与えない音環境を構築する上で、重要な考えである。

8. 近くにあるものへの注意

我々の聴覚や視覚は、近くにある物体や音に対して優先的に注意を向ける傾向があります。これは、身の安全を確保し、食事や他の生活必需品を見つけるための生存戦略の一部です。例えば、野生動物は近くに潜んでいる危険を感知し、すぐに反応して逃げるができるようになっていきます。

9. 音量

音量を下げることで、聴く人は聞き取りに少し努力が必要になり注意力を引き寄せられ、音楽や踊りに対する好奇心や探究心が刺激される可能性があります。音楽や踊りを楽

しむ際には、音響環境を快適に保つことが重要であり、適切な音量の設定がその一環として考えられます。音量を調整することで、よりリラックスした状態で音楽や踊りを楽しむことができます。

10. 音の細部への集中

観客への音量が適度であると、音楽の細かい部分により注意が向けられます。リズム、旋律、ハーモニーなど、音楽の微妙な要素をより深く感じ取ることができます。

11. 大音量の環境

音楽が周囲の空間を支配し、人々はその場を離れたと感じることがあります。これは、大きな音が圧迫感や不快感を与えるためです。音楽の鑑賞は、個々の好みや聴覚の快適さに大きく依存するため、個人のニーズに合わせて音量を調整することが重要です。

12. 風の盆の情景(サウンドマーク)

八尾の町から観光客が帰った後の静けさ、夜の町のどこからか聞こえてくる音楽に誘われてそこから本来の風の盆が始まります。

町筋には、家々の軒下に溝があり、冬に屋根雪を流し運ぶための知恵である「エンナカ」の川水が気持ちいい音をたてて流れています。

風の盆の3日間、深夜八尾の町を歩くと、静寂の中からおわらの旋律が聞こえてきます。この美しい音楽に誘われ、ついついその音の方向に向かい、踊りに興じている人々の風景を楽しむことがあります。昼間の音響装置を使用しての踊りは、一瞬見てみるだけで十分だと思われ、素通りしたくなることもあるかもしれません。夜の静けさとおわらの音楽は、より特別な体験を提供し、人々を引き寄せます。

2020年9月1日新型コロナウイルス感染拡大を受け、おわら風の盆の開催が中止となり町から一切のおわらの調べが消えたと思いきや、聞名寺での奉納踊りが終わった深夜に諏訪町を歩いているとエンナカの川の流れとともに微かな胡弓の調べが聴こえてきました。

私が風の盆としての情景(サウンドスケープ)をデザインする原点であるサウンドマークです。

譜面

13. 越中八尾おわら節、地方の情景を考える

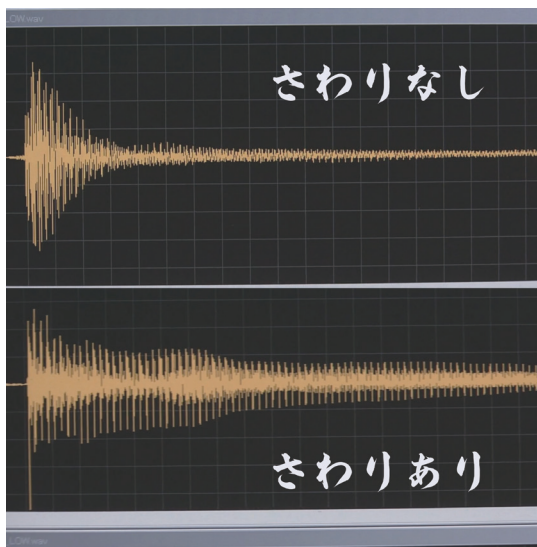
❖三味線

おわら節の調子と拍子の要となり、一つの楽器で拍子と旋律を奏でることができる世界でも珍しい楽器です。最初の3拍(ドン・ツン・テン)で拍子と調子を地方と踊り手に伝えます。

撥打による切れの良い音色が特徴で、三味線の特徴のひとつに「さわり」があります。これは一の糸の棹の先端部にあって、棹の後ろ側からネジで調節し、響きを加える部品です。一の糸に触れるか触れないか微妙な調節によって音色を変えます。



さわり



さわり波形

❖胡弓

おわら節に不可欠な楽器。唯一の連続音の楽器、胡弓の調べが独特の演奏方法で楽器本体を回しながら、弓と弛んだ糸を調整しながらおわら節の三味線や唄の余韻となったり踊りの流れを形作ったりしているかのような雰囲気です。

❖太鼓

流し踊りでは身体に吊るして叩き、唄や三味線をひきしめる役割を果たします。

❖唄

歌詞で情景を伝える役割を担い、踊りや楽器の演奏に合わせて歌うためには熟練が必要です。

❖囃子ことば

囃し方は、音感、拍子、勢いが必要な役割で管弦楽などの指揮者のように地方と踊りの流れを全体として理解し踊りを進行させるおわらの中で難しい部分の一つとされています。

14. 立方(踊り)の情景

おわら踊りには民舞と日舞の要素、舞い・踊り・振りの三要素があります。

❖舞い

音楽に合わせて、摺り足や宙を舞うような手や腕の上半身の静かな動作で心の内面を所作で表現

❖踊り

盆踊りなど軽快な歌や音楽に合わせて、体をリズムカルに動かし、感情や意味を表現。

❖振り

江戸時代に歌舞伎や人形浄瑠璃の発達にもなって派生した歌や音楽に合わせて、演劇的要素が強く、日常的な動きやしぐさを舞踊として表現する。

日本舞踊には、心、性根、表現、形、動き、間、位置、流れの八つの目的があり地方の旋律や拍子や余韻に調和して演者の『心』が重要視され演じると言われます。

15. おわら踊りの情景

❖女踊り

「四季踊り」や「蛭狩り」など、女性の優雅で柔らかさが漂う踊りです



女踊り

❖男踊り

「案山子踊り」など、黒の法被、黒の腹掛け、股引を着用し、緩急と切れ、手足の決めを見せ場とする勇壮で躍動的な踊りです。



男踊り

❖夫婦踊り(組踊り)

民謡民舞では珍しい男女の組踊り、夫婦の情愛を表現する振りとも言えます。



夫婦踊り

【唄の例(夫婦踊り)】

三千世界の松の木や枯れても あんたと添
わなきゃ娑婆へ出た甲斐がない
私やあなたにあげたいものは 金の成る木
とオワラ卵酒
思い思われ歩きゃ 二百十日のおわら盆の
月

❖豊年踊り

古くから踊られる踊りで、種まきや稲刈りといった農作業の動きを手や指先を巻くように舞踊の要領で表現しています。男踊り、女踊りを「新踊り」と呼ぶことから豊年踊りは「旧踊り」と呼ばれることもあります。

16. おわら踊りを披露する聞名寺と東別院

富山県八尾に佇む格式ある聞名寺と、愛知県名古屋市の都心に広がる壮麗な東別院。これら二つの場所で繰り上げられるおわら踊りと演奏は、サウンドスケープによって優雅な情景を舞い上げます。

17. 聞名寺 浄土真宗本願寺派(お西)

(創建年：応仁二年(1468年))

越中八尾の地域において非常に重要な存在であると言えます。越中八尾の文化と歴史に深く根ざし、おわら踊りの奉納や地域の様々



聞名寺境内での輪踊り

な行事において中心的な役割を果たしています。諸々の先人に追悼の誠をささげ、講中独特のおわらの念仏入り歌詞と合掌の所作を通じて、平成6年秋に結成された風の盆講中による奉納踊りが毎年9月3日には境内の「風の盆の碑」前において、仏事を執行しています。

2020年から蔓延したコロナ禍でも聞名寺では仏事として風の盆、おわら踊りと旋律は絶えることはありませんでした。

18. 東別院 真宗大谷派(お東) (創建年：元禄3年(1690年))



東別院

真宗本廟を本山と仰ぐ。通称は、「東別院」、「東御坊」、「名古屋東別院」、「東本願寺名古屋別院」。浄土真宗本願寺派の「西別院」に対して、「東別院」と通称される。

東別院では、「越中おわら節」の魅力を広く多くの方に伝え、楽しんでいただきたいと、2006年から境内で始めた「越中八尾おわらの夕べ」は2020年の新型コロナウイルス感染拡大防止のため、無観客により奉納し、その様子を、名古屋芸術大学の学生さんと共にLive配信をしました。

19. 聞名寺におけるサウンドスケープの手法

古いお寺の広縁でくり広げられる奉納としてのおわら踊り、街中の賑やかな風の盆に対して、静かな雰囲気です。音響家として先入観と観念にとらわれずスピーカーの設置場所やマイクアレンジなど情景を作るために思考します。

- ❖メインスピーカー：K-array202ラインアレイ効果を利用し小音量でも遠距離の人に対しての音の情景を伝える。
- ❖KGEAR GP8Aを地方用モニタースピーカーで欄干の一部のような景観にする
- ❖古いお寺のため電源が確保できないため、3キロワットのリチウムイオンバッテリーでスピーカーシステムを駆動。出力電圧波形が正弦波であることと、電圧降下が発生しないため非常にクオリティーが高く立ち上がりの良い音を担保できます。



K-array202



KGEAR GP8AKG



バッテリー(最大出力3000W、蓄電容量5656Wh)

❖スピーカーの設置場所：音源を1点に集中させるため、舞台の上下手に設置せず、極力舞台中央に設置し、音の方向性と踊りの方向性(視覚と聴覚)を一致させる。

❖踊り手の後ろにスピーカーを設置し、踊り手の仕方としてのモニターにもなり、踊り手よりもスピーカーが後ろに存在するので、お客さんは無意識に踊りに集中しやすくなる。

❖生演奏に近い舞台上の音響環境を構築するために、メインスピーカー・モニタースピーカー音のキャラクターを合わせる。

音源として複数存在させないことがお客様にとって集中できると思われれます。また、株式会社サウンドアトリエ吉田ひであき氏と長年構築してきた『音の壁を造らない演出空間』



聞名寺でのサウンドアトリエチューニング

のために、頭部伝達関数を活用した音響システムを快適&時短チューニング『サウンドアトリエチューニング』を採用することで明瞭度と違和感のない音響環境が構築できます。

三味線の力強い撥打ちと、拍子と旋律、さわりの音色を生かした音作り。地方の前後を踊りながら通過する舞台の奥行きが狭いため、スタンドマイクと楽器の距離を確保するために肩越しからマイクアレンジをする。



三味線のマイクアレンジ

❖三味線の短い余韻を彩るかのような胡弓の演奏、八尾では『三味線と胡弓、それぞれが音楽の一部として共に調和し、独自の役割を果たしています。三味線の余韻としての胡弓は(電気音響ではリバーブ的)と考えるとミキシングバランスも変わります。胡弓が主旋律を奏でるのは合の手と言われる前奏と唄と唄の間奏です。

❖越中八尾おわら踊りと越中八尾おわら節、唄と演奏を聞かせる音楽と踊りを魅了させる音楽を理解することで情景が創造出来ます。

❖やや控えめで明瞭度ある音響環境がお客様に舞い・踊り・振りから演者の『心』を想像させます。

❖露天で買い物を楽しむ人、踊りを見たくて広縁に近づいて風情を楽しむ人、聞名寺境内が風の盆の風情に包まれます。

20. 東別院におけるサウンドスケープの手法



東別院全景

広大な境内と壮大な本堂前の石舞台で日暮れから繰り広げられるおわらの流し踊りと舞台踊りと輪踊りは八尾の町や聞名寺とは異なる雰囲気です。

❖基本的には聞名寺と同じサウンドスケープの手法。

間口20メートルの舞台に対して、左右にスピーカーを設置せず本堂の上り階段を利用し



NEXO GEO1210

て、舞台センター奥賽銭箱前の高い位置にラインアレイタイプ(NEXO GEO1210)のスピーカーを設置。

❖聴覚と視覚の方向性を舞台中央に意識させお客様にストレスを感じさせないようにする。

❖踊り手は、舞台後ろから聞こえてくる地方の演奏で、後押しされるように踊りやすく、踊りと同じ視線上にお客様が客席より踊りを楽しむ。

❖『サウンドアトリエチューニング』を採用。



東別院でのチューニング画面



K-array202

❖オープニングの演出で、参門よりの流し踊りがあり、音源としてK-array202をリチウムイオンバッテリー駆動で設置。



駆動したバッテリー

❖シユアQLX-DワイヤレスシステムB帯使用に対してセカンドステージ株式会社小諸浩和氏にワイヤレスマネジメントを依頼して専用測定器により妨害電波やノイズを感知し、特定することで未然に電波トラブルを防いでいます。



流し踊り



三味線にワイヤレスをつける

21. 名古屋芸術大学の授業としての取り組み

2016年10月20日第10回『越中八尾おわらの夕べ』から、音響担当として名古屋芸術大学音楽領域ミュージックエンターテインメントディレクションコース(指導 岡野憲右)が校外授業として産学協同で取り組んでいます。

大学からは音響機材・映像機材と技術(音響・照明・映像)スタッフ・制作スタッフ約20～30名が参加しています。



岡野憲右氏と学生



22. お客様に対しての音声ガイドによるサービス

2021年より名古屋在住の外国の方の入場を考え、Sonic Instruments水野政夫氏協力でDigi-wave400シリーズを使用し英語による音声ガイダンスを始めました。

Digi-waveは屋内用ですがレピーターモードで広い屋外会場でも安定して使用できることが実証されました。

23. コロナ禍における八尾の街の対応と聞名寺住職が伝える奉納踊りの心

2020年1～5月新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行により、八尾の町から9月1～3日の間、太平洋戦争で中断した以外では初めておわらの調べと踊りが消えました。

聞名寺住職である霧野雅磨様は、コロナ禍の中でも本堂でおわら奉納踊りを風の盆講中と共に行い、これを民謡の単なる集いではなく、宗派を超えてご先祖のご苦勞を偲び、感謝申し上げようとする人々の心の行事として続けました。彼の奉納の言葉には以下のような意味が込められています：

「おわら踊りを見せるのではなく、見ていただく」

奉納踊りをする講中の方々に向けて述べられたもので、奉納踊りを踊ることにおいて、単に技量やパフォーマンスにこだわるだけでなく、その踊りの背後にある深い意味や価値、伝統を理解し、感じてほしいというメッセージです。

同時に観光化が進む中で、おわら踊りが本来の精神や伝統から外れていくことがある中、地元の人々に対する戒めとして述べられました。単なる観光イベントではなく、踊りの奥深さや歴史を真摯に受け止め、伝統を守り続けることの重要性を強調しています。

「音響技術者として音を聞かせるのではなく、聴いて感じていただく」

PA (パブリックアドレス)からSR (サウンドリフォーメント)へ。

音響技術者として、単に音を伝えるのではなく、演じられている情景の一部として聴衆が音楽を魅力的に感じ、共有できる体験を提供することを目指すサウンドスケープとして没頭できるように努力する姿勢が示されています。

伝統行事や音楽パフォーマンスにおいて、

深い意味と価値を持つサウンドスケープを共有し、感じることの重要性を伝えているメッセージとおもえます。

【越中おわらを紹介するパブリックコメント】

越中おわら節の哀切感に満ちた旋律によって、坂が多い町の道筋で無言の踊り手たちが洗練された踊りを披露する。艶やかで優雅な女踊り、勇壮な男踊り、哀調のある音色を奏でる胡弓の調べなどが来訪者を魅了する。

*追記

日本の楽器で連続音を奏でる種類は限られています。江戸時代では主に庶民が手に入れて演奏できる楽器は三味線や太鼓であり、尺八は武士階級などが楽しむ楽器でした。しかし、明治時代に階級制度が廃止され、庶民も尺八を演奏する機会が増えました。尺八はその後、民謡など様々な分野で活用され、演奏が行われるようになりました。一方、胡弓は演奏技術が難しく、徐々に使用されなくなり、富山県など一部地域でのみ続けられています。



*資料

- ・ポータブル蓄電池PVS-6000

聞名寺の古い建物では、音響電源が20Aしか確保できず、電圧降下によるパワーロスがありました。

2023年はスピーカーシステムの近くにバッテリーを配置し、ミキシング周辺機器を含めて安定した電力供給を確保しました。

3kWの大出力

キャリーバッグ型なので持ち運びが便利
従来のポータブル蓄電池よりも長時間使用
充電しながら給電も可能。

充電時間：2時間

出力波形：純正弦波

最大出力：3000W

蓄電容量：5656Wh

【参考文献】

『おわらの記憶』著者：おわらを語る会／編

『笠原輝芳作品集』絵：笠原輝芳／文 村田千晴 文／
笠原輝芳作品集をつくる会

【ホームページ(引用)】

浄土真宗本願寺派 桐野山聞名寺

浄土真宗本願寺派 本願寺名古屋別院

越中八尾おわら道場

